

病虫害発生予報 第3号(6月予報)

和歌山県農作物病虫害防除所
TEL 0736(64)2300

< 予報の概要 >

作物名	病虫害名	発生量	作物名	病虫害名	発生量
水稲	いもち病 紋枯病 ヒメトビウンカ 縞葉枯病(紀北地域) ツマグロヨコバイ セジロウンカ トビイロウンカ ニカメイチュウ イネミスズウムシ	並 並 並 やや多 並 並 並 並 並	カンキツ	黒点病 かいよう病 ミカンハダニ ヤノネカイガラムシ チャノキイロアザミウマ アブラムシ類	並 並 やや少 やや多 並 並
			カキ	うどんこ病 円星落葉病 角斑落葉病 かきクダアザミウマ フジコナカイガラムシ	並 並 並 並 並
ウリ類	モザイク病 べと病 うどんこ病 疫病 つる枯病	並 並 並 並 並	モモ	せん孔細菌病	並
			野菜全般	アブラムシ類 ハダニ類 ミカンキイロアザミウマ	やや少 並 やや少

気象予報

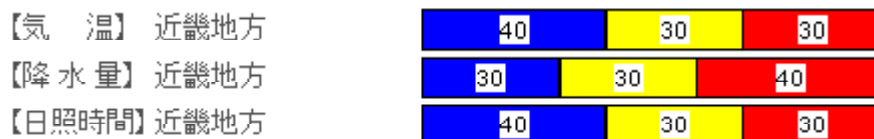
1か月予報(予報期間 5月22日から6月21日 大阪管区气象台)

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わる見込みです。期間の後半は天気のぐずつく時期があるでしょう。

週別の気温は、1週目が低い確率50%、2週目が平年並または低い確率ともに40%です。

< 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%) >



凡例: ■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

6月	月平均気温(平年値) (°C)		月降水量(平年値) (mm)	
	和歌山	22.8	和歌山	201
潮岬	21.9	潮岬	359	

I. 水 稲

1. いもち病(苗いもち、葉いもち)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 紀南早植え地域の常発地では気象条件に注意し、薬剤防除は早めに行う。

② 紀中、紀北の普通期栽培地域では、キヌヒカリ、コシヒカリなどの罹病性品種を作付けする場合は、育苗箱処理剤を施用する。

2. 紋枯病 紀南地域

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 気温が高まると病勢が進展するので常発地では発生に注意する。

3. ヒメトビウンカおよび縞葉枯病

(1) 予報内容 ヒメトビウンカ 発生量 並
縞葉枯病(紀北地域) 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 予察灯による5月の誘殺数は4半旬現在、紀の川市0頭(平成0.1頭)、上富田町1頭(平成0.0頭)、那智勝浦町1頭(平成0.0頭)と平成並である。

② ヒメトビウンカ(越冬世代)のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は、和歌山市で15.3%(前年17.7%)、かつらぎ町で19.1%(前年11.3%)であった。これらの保毒虫率は、平成3~12年の平均(2.8~3.4%)より高い。

③ 平成21年8月の紀北地域の本田におけるイネ縞葉枯病発病株数は、25株あたり0.6株(平成0.04株)と平成に比べて多かった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① イネ苗へのヒメトビウンカの飛来を防ぐため、雑草地付近での育苗を避ける。

② 田植え時はヒメトビウンカに効果がある育苗箱処理剤を施用する。

③ 第1世代成虫は6月下旬に水田に飛来し、第2世代幼虫の発生最盛期は7月上旬と考えられることから、前年にイネ縞葉枯病の発生が認められた地域では、幼虫を対象にこの時期の追加防除を行う。

4. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 ツマグロヨコバイ 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 予察灯による5月の誘殺数は4半旬現在、紀の川市0頭(平成0.5頭)、上富田町0頭(平成0.0頭)、那智勝浦町1頭(平成0.0頭)と平成並である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 前年にツマグロヨコバイの発生が多かった地域では、田植え時に有効な成分を含む育苗箱処理剤を施用する。

5. セジロウンカ

(1) 予報内容 発生時期 やや遅 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 予察灯による5月の誘殺数は4半旬現在、いずれの地域も0頭（平年紀の川市0.2頭、上富田町1.3頭、那智勝浦町0.9頭、初飛来の平年：5月3半旬）である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 田植え時に有効な成分を含む育苗箱処理剤を施用する。

6. トビイロウンカ

(1) 予報内容 発生時期 並 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 予察灯による5月の誘殺数は4半旬現在、いずれの地域も0頭（いずれの地域も平年0.0頭、初飛来の平年：7月5半旬）である。

7. ニカメイチュウ

(1) 予報内容 発生量 少

(2) 予報の根拠

- ① 予察灯による5月の誘殺数は4半旬現在、いずれの地域も0頭（平年紀の川市0.1頭、上富田町0.0頭、那智勝浦町0.0頭）である。

- ② フェロモントラップ（紀の川市）による5月の誘殺数は4半旬現在、0頭（平年0.4頭）である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 前年に発生が認められたほ場では、田植え時に有効な成分を含む育苗箱処理剤を施用する。

8. イネミズゾウムシ

(1) 予報内容 発生時期 並 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 予察灯による5月の誘殺数は4半旬現在、上富田町で31頭（平年4.1頭）と平年に比べ多かったが、紀の川市は0頭（平年1.1頭）、那智勝浦町は16頭（平年27.5頭）と平年並である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 有効な成分を含む育苗箱施薬を行っていないほ場で、田植え3～7日後に成虫による食害株率が30%あるいは50株あたり成虫数が12頭を越える場合（5%被害許容）は、直ちにシクロサルU粒剤2、トレボン粒剤などで防除する。

II. 野 菜

<ウリ類>

1. モザイク病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域の露地栽培キュウリ、施設栽培キュウリおよびトンネル栽培スイカにおける発生ほ場率は5月3半旬現在、いずれも0%（平年0%）と平年並であった。

- ② 紀中地域の施設栽培キュウリおよびトンネル栽培スイカにおける発生ほ場率は5月3半旬現在、ともに0%（過去2年間の平均0%）であった。

- ③ アブラムシ類の発生はやや少と予想される。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① アブラムシ類の防除を徹底する。

2. べと病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域の露地栽培キュウリにおける発生ほ場率は5月3半旬現在、0%（平年65%）と低く、施設栽培キュウリにおける発生ほ場率は50%（平年59%）と平年並であった。
- ② 紀中地域の施設栽培キュウリにおける発生ほ場率は5月3半旬現在、46%（過去2年間の平均54%）であった。
- ③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 施設栽培では換気を十分に行い、湿度低下を図る。
- ② 薬剤防除は予防散布を重点に、葉裏に十分かかるように行う。

3. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域の露地栽培キュウリにおける発生ほ場率は5月3半旬現在、0%（平年57%）と低く、施設栽培キュウリにおける発生ほ場率は33%（平年49%）とやや低かった。
- ② 紀中地域の施設栽培キュウリにおける発生ほ場率は5月3半旬現在、54%（過去2年間の平均61%）であった。
- ③ 紀中地域のトンネル栽培スイカにおける発生ほ場率は5月3半旬現在、0%（過去2年間の平均0%）であった。
- ④ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 施設栽培やトンネル栽培では通風をよくし、薬剤防除は薬液が葉裏にも付着するようていねいに散布する。

4. 疫病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域のトンネル栽培スイカにおける発生ほ場率は5月3半旬現在、0%（過去4年間の平均0%）であった。
- ② 紀中地域のトンネル栽培スイカにおける発生ほ場率は5月3半旬現在、0%（過去2年間の平均0%）であった。
- ③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤防除は予防散布を重点に、6月上旬ごろから定期的に行う。
- ② ほ場の排水を良くし、マルチ、敷わらを行う。

5. つる枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域のトンネル栽培スイカにおける発生ほ場率は5月3半旬現在、0%（平年0%）と平年並であった。
- ② 紀中地域のトンネル栽培スイカにおける発生ほ場率は5月3半旬現在、0%（過去2年間の平均0%）であった。
- ③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 梅雨期の降雨にともない株元から発病するので、薬剤散布は株元中心に行う。

＜野菜全般＞

1. アブラムシ類

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 紀中地域のトンネル栽培スイカでは5月3半旬現在、ワタアブラムシの発生ほ場率43%（平成57%）、1葉あたり寄生虫数0.2頭（平成0.2頭）と平成並であった。

② 黄色水盤（紀の川市）への5月の飛来数は4半旬現在、64頭（平成347頭）と平成に比べやや少ない。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 同一系統の薬剤は連用しない。

② 薬剤散布にあたっては葉裏に薬液が十分かかるように行う。

2. ハダニ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 紀中地域のトンネル栽培スイカでは5月3半旬現在、1葉あたり寄生雌成虫数はカンザワハダニ0.3頭（平成0.3頭）と平成並であったが、ナミハダニは0.0頭（平成0.5頭）と平成に比べやや少なかった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 同一系統の薬剤は連用しない。

② 薬剤散布にあたっては葉裏に薬液が十分かかるように行う。

3. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 紀中地域のトンネル栽培スイカでは5月3半旬現在、発生ほ場率7%（平成57%）、1葉あたり寄生虫数0.0頭（平成0.4頭）と平成に比べやや少なかった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発生が多い場合は4～5日間隔で、2回以上連続散布を行う。

② ハウス栽培は収穫終了後に、蒸し込みを行なう。

Ⅲ. 果 樹

＜カンキツ＞

1. 黒点病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 近年、剪定枝の放置園や管理不良園等も多くなっており、枯れ枝量も多く菌密度は高いものと思われる。

② カンキツの開花盛期は、ウンシュウミカン（「興津早生」）で5月15日となり平成より約7日遅かった。「清見」は5月18日となり約6日遅かった。今後の生育は平成並と予想される。

③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 第1回防除（5月下旬）を実施していない園では早急（6月上旬）に薬剤散布を行う。第2回防除は6月下旬とするが、第1回防除からの累積降水量が250mm程度となった時点で散布する。薬剤はマンゼブ剤またはマンネブ剤とする。

- ② 枯れ枝や剪定枝の処理を徹底する。

2. かいよう病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① カンキツの開花盛期は、ウンシュウミカン（「興津早生」）で5月15日となり平年より約7日遅かった。「清見」は5月18日となり約6日遅かった。今後の生育は平年並と予想される。
- ② 昨年の巡回調査では発病果率は低かったが、春葉および夏秋梢の発病園率は平年並であった。
- ③ 県予察ほ場（無防除）における越冬病斑量は平年に比べ少なく、春葉における初発は5月25日（初発日の平年：5月22日）でほぼ平年並であった。
- ④ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 罹病性品種、常発園や春梢発病の認められる園では銅水和剤（炭酸カルシウム剤200倍加用）を散布する。
- ② 罹病性品種や常発園では、罹病枝葉の剪除及び防風施設の整備に努める。
- ③ 今後、強風雨があれば発病が多くなる可能性がある。

3. ミカンハダニ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県予察ほ場における5月中下旬の発生は、マシン油乳剤散布園においてみられず、無防除園では、雌成虫と若齢幼虫がわずかにみられた。
- ② 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性対策としてマシン油乳剤の散布を励行する。マシン油乳剤の散布は発生初期に行なうと高い防除効果が得られる。

4. ヤノネカイガラムシ

(1) 予報内容 発生時期

第1世代1令幼虫最盛期 6月1半旬 （平年6月1半旬）

同 2令幼虫最盛期 6月4～5半旬（平年6月4～5半旬）

同 雌成虫初発日 6月5半旬 （平年6月5半旬）

発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 果樹試験場内の県予察ほ場（無防除）での第1世代1令幼虫の初発は5月20日（初発日の平年：5月16日）にみられ、ほぼ平年並であった。
- ② 昨年10月の巡回調査では、発生園率は12%（平年7.5%）、寄生果率は0.7%（平年0.5%）で、平年よりやや高く雌成虫の越冬量も平年に比べやや多いと考えられる。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 多発園では、2令幼虫最盛期（県予察ほ場では6月4～5半旬）にマシン油乳剤や有機リン剤系の殺虫剤を散布する。

5. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 予察ほ場（無防除）における初発時期および発生量は平年並であった。
- ② 日高郡由良町の現地ほ場に設置した黄色粘着トラップにおける初発時期は平年並で誘殺数はやや少であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 地域での発生消長調査の結果により、適期防除に努める。

6. アブラムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県予察ほ場（無防除）、各地域とも発生時期は平年並で、発生量はやや少～平年並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 各園地の発生の状況を把握し、適期防除に努める。

<カ キ>

1. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 5月中旬の巡回調査では、被害葉率は「富有」で0%（平年0.2%）と平年並であった。

- ② 昨年10月の巡回調査では、「富有」の発病葉率は39.9%（平年33.0%）と平年並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 菌は葉裏の気孔から侵入するので、葉裏をていねいに散布する。

2. 円星落葉病、角斑落葉病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報根拠

- ① 前年秋期の発生から、越冬密度は角斑落葉病、円星落葉病ともに平年並と考えられる。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 円星落葉病の子のう胞子飛散は、5月下旬～7月中旬の降雨後に多くみられるので、この時期に薬剤を定期的に予防散布する。

- ② 防除は有機銅水和剤、マンゼブ又はマンネブ水和剤とする。

3. カキクダアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 黄色粘着板による4月の誘殺数は1頭（平年6.8頭）と平年並であった。

- ② 5月中旬の巡回調査では、被害葉率は「富有」で0.3%（平年0.6%）、
「刀根」・「平核無」で0%（平年0.2%）と平年並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 防除適期は新成虫飛来期の6月上中旬と予想される。

4. フジコナカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 5月中旬の巡回調査では、寄生花蕾率は「富有」で0.9%（平年1.0%）と平年並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 本種の防除には孵化幼虫の成育ステージがそろそろ6月上中旬の防除が重要である。多発園では散布量を多くして、ていねいに散布する。

<モ モ>

1. せん孔細菌病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 5月中旬の巡回調査では、発病葉率は2.0%（平年2.2%）と平年並であった。
 - ② 4月中旬～5月上旬における感染好適条件（最大風速10m/s以上、かつ降水量5mm以上）をみたす日数は1日（平年1.72日）で平年並であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 降雨前の予防散布に努める。
 - ② 防風ネット、防風樹などの耕種的防除を励行する。

<果樹全般>

1. カメモシ類

- (1) 予報内容 発生量 紀北地域：並 紀南地域(有田以南)：やや多
- (2) 予報の根拠
 - ① チャバネアオカメモシ成虫の1か所あたりの越冬虫数は、県北部では0.2頭（平年0.2頭）で、平年並であった。県南部（有田以南）では0.9頭（平年0.3頭）で、平年に比べやや多かった。
 - ② 県南部における越冬箇所率は39%（平年22%）で、やや多かった。
 - ③ 5月上旬以降、県南部における果樹園への飛来および予察灯への誘殺数が、やや多くみられる。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 果樹園への飛来と被害に注意し、被害のみられる場合には、薬剤散布を速やかに行う。
 - ② 県南部におけるウメ・スモモなどの果実被害（主に山間部周辺）に注意が必要である。
 - ③ 平成22年度発生予察注意報第2号および県農林水産総合技術センターのホームページの果樹カメモシ情報を参照する。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○農業環境保全室ホームページ <農作物病虫害防除所コーナー>

[http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/071400/
boujyosyo-yosatsujyouhou.html](http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html)

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所(TEL 0736-64-2300)までお願いします。